

特集「人文科学とコンピュータ」の編集にあたって

未代 誠仁^{1,a)}

学際領域という言葉には、新たな学問領域の創出という希望とともに、未踏の世界につきものの不安なニュアンスがある。研究である以上は開拓者精神が不可欠といえどもそれまでだが、領域の定義すら曖昧な中で、一つひとつの研究成果を適切に発信し、社会にフィードバックするための方法を創出するにあたっては少なからず生みの苦しみが伴う。

情報処理学会には、学際領域における情報処理関連の研究を積極的に支援する研究会がいくつも存在している。本特集号の委員らが参加している「人文科学とコンピュータ研究会」(SIG-CH)もその一つであり、同学会内で30年に渡り人文科学と情報処理の橋渡しをサポートしてきた。

一人の大学教員として、SIG-CHがカバーする研究領域と大学の関係を眺めてみると、いわゆる講座制の消滅により、大学教員の「研究者としての遅咲き」が難しくなってきた点には留意する必要があると感じる。また、学際領域には学部・学科といった教育システムの整備が必然的に遅れている。そのため、学際領域に活動の場を求め研究者は、先例の少ない研究フィールドにおいて短期間のうちに半ば独習に近い形で研究スタイルを確立しなければならないというリスクに晒されがちである。このことは、学際領域における取り組みを人から人に伝え残していく上での大きな課題である。

当方は、本特集号に掲載する論文が学際領域での活躍を目指す研究者にとっての道標になってほしいという願いを持って、編集委員長としての仕事に取り組んできた。査読にあたっては、情報処理学会が示す基準を満たしつつ、人文科学分野の視点で有用性を評価できるように注力した。結果として、英語論文1編を含む7編を掲載することができた。

本特集に掲載された論文は、人文科学に関連する多様なトピックを扱いながら、客観的な分析に基づき、仮説に対する適切な検証を実施した研究の取り組みを示すものである。学際領域における研究成果発信の好例として諸分野の研究活動に寄与することができれば幸甚である。

本特集号は、下記のスケジュールで実施した。

- CFP：2018年10月5日
- 投稿メ切：2019年5月16日
- 編集委員会
 - － 第1回：2019年5月17日
 - － 第2回：2019年8月2日
 - － 第3回：2019年11月25日

「人文科学とコンピュータ」の名を冠した特集号としては、一昨年に続いて2度目の刊行となったが、投稿総数は10件にとどまり、前号および事前の予想を下回る結果となった。一方で、7編が採録という結果は前号と同水準であり、採録率としては予想を上回るものとなった。前号刊行時と同じく高い研究水準が維持されている一方で、新たな研究フィールドの積極的な開拓が引き続き重要な課題だと考えている。

SIG-CHが設立30周年を迎える節目の年に本特集号を刊行できたことについて、ご協力をいただいた編集委員会の幹事および委員の方々、ならびに情報処理学会関係者の方々に深く感謝の意を表す。また、本特集号に玉稿をご投稿いただいた著者の皆様、ご多忙の折にご協力をいただいた査読者の皆様に、編集委員会を代表して心よりお礼を申し上げます。

「人文科学とコンピュータ」特集号編集委員会

- 編集委員長
未代誠仁 (桜美林大学)
- 副編集委員長
山田太造 (東京大学), 鹿内菜穂 (亜細亜大学)
- 編集委員
大内英範 (人間文化研究機構), 小木曾智信 (国立国語研究所), 河瀬彰宏 (同志社大学), 北本朝展 (国立情報学研究所), 後藤 真 (国立歴史民俗博物館), 阪田真己子 (同志社大学), 鈴木卓治 (国立歴史民俗博物館), 関野 樹 (日本国際文化研究センター), 高田智和 (国立国語研究所), 永崎研宣 (人文情報学研究所), 松村 敦 (筑波大学), 村井 源 (公立はこだて未来大学), 村川猛彦 (和歌山大学), 藤本 悠 (奈良大学)

¹ 桜美林大学
J. F. Oberlin University
^{a)} a.kitadai@gmail.com